

二〇二五年三月二日

三極の花の香気を潜りけり
麗らかや病忘れて一万歩
寺うらら仏足石に花手水
玉垣の一句一句に春日燦
春耕に一族郎勢揃ひ
春雷の天にくぐもり遠ざかる
花菜畑見え隠れしつ登校児
青空に傘を拡げし枝垂梅
見つからぬ靴の片方げんげ畑

二〇二五年三月九日

むべ
康子
もとこ
せつ子
みきえ
むべ
うつぎ
せつ子
あひる
よし女
むべ
博充
もとこ

二〇二五年三月一八日

春憂しと母の電話の長きこと
足弱の夫励ましつ青き踏む
春の鳶ひりがへりをる高嶺雲
雑木山日毎に笑ひそめにけり

二〇二五年三月一七日

まぼろしのごとき船影沖朧
堰落つる水音の楽や里の春
料亭の灯籠点る春しぐれ

むべ
ぽんこ
董雨
明日香
わかば
明日香
ぽんこ

二〇二五年三月一六日

機窓いま雲居突き抜け春日燦
慰霊碑に降りそぐやに囀れる
古い母の春眠覚ます蒸しタオル
出来たてをつまめば歪む草の餅
参道を清むがごとく春しぐれ
梅満開絵本のような一山家
昨夜の雨袴に溜める土筆かな

二〇二五年三月一五日

瀬戸の風通ひちらほら山桜
春霖の音微かなる雑木山
母の背を優に超えたる卒業子

なつき
なつき
あひる
千鶴
明日香
よし女
えいじ

きよえ

むべ

せいじ

毎日句会みのる選・二〇二五年三月二四日